

2020年度③

民 法

(全 3 ページ)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙・下書き用紙は、この冊子の中に折り込んであります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 解答は指定された範囲に記載すること。「書き終わり」をこえて記載した場合は、採点をしないことがあります。
5. 試験終了後、問題冊子・下書き用紙は持ち帰りなさい。

民法③

I 下記についてそれぞれ 80 字以内で説明しなさい。(各 10 点)

- (1) 権利外観法理 (表見法理)
- (2) 推定の及ばない嫡出子

II 次の問題〔1〕〔2〕のうち、1問を選択して解答しなさい。(100 点)

2020 年 4 月 1 日施行の改正民法を基準に解答すること。なお現行法による解答についても不利益には扱わない。

〔1〕 次の事実をふまえた上で、下記の問いに答えなさい。

(事実)

1 A (38 歳) は先代から引き継いだ酒屋を営み、妻 B (35 歳) と一人娘 C (14 歳) がいる。ある日、B は、A の物忘れが少しずつひどくなっていくように感じたため、A に病院で検査するように勧めた。A はこれに応じ、大学病院で診察・検査を受けたところ、若年性アルツハイマー病であると診断された。A、B、C は大きなショックを受けたが、B はこれからも A を支えようと決心し、A について、保佐開始の審判を申し立てたところ、審理の結果、ある年の 2 月 10 日、B を A の保佐人とする保佐開始の審判が行われた。

(問 1)

その後、同年 3 月 1 日、A は C から、ブランド物の財布が欲しいとせがまれた。A は、翌日、B に何ら相談することなく、C の代理人として町の金融業者 D との間で 20 万円を借り受ける契約を締結した。同年 3 月 5 日、B は上記契約がなされたことを知った。B は上記契約をなかつたことにしたいが、そのようなことは法的に認められるか。(20 点)

2 その後、同年 6 月 20 日、A は B の知らない間に、A が所有する甲土地を、5 年前酒屋店舗の増改築で世話になった不動産業者 E に 3000 万円で売却する契約を締

結した。契約締結交渉中、EがAに対して「奥さんが良く売却を許したね。」と話したところ、Aは「Bは良く出来た嫁だと思う。わがまま言ってもニコニコ笑って受け入れてくれるし、今回の売却も背中を押してくれたんだ。」と答えた。同年6月28日、EがAに3000万円を支払い、同日、AからEへ甲土地の所有権移転登記手続がなされた。

- 3 同年7月20日、Aは、Eから受け取った3000万円のうち600万円を債務の弁済に充てた。このほか、Aは1000万円を競馬やパチンコにつぎ込んだ。

(問2)

- ① Bは、AE間の売買契約を取り消して甲土地の返還を請求することができるか。(30点)
- ② AE間の売買契約のBによる取消しが認められる場合、AとEはそれぞれ相手に対してどのような義務を負うか。(20点)
- ③ AE間の売買契約がBにより取り消された後、EがFに甲土地を3500万円で売却し、EからFに甲土地の所有権移転登記手続がなされた。BはFに対して甲土地の返還を請求した。Bの請求は認められるか。(30点)

〔2〕 次の事実をふまえた上で、下記の問いに答えなさい。

- 1 Aは自己の所有する未登記の建物甲を賃料月額10万円、敷金30万円でBに賃貸していた。Bが建物をAに無断で改造したため、Aは、契約を解除する旨を伝えて、直ちに明け渡すように求めた。Bは解除の主張は争わなかったが、解除の意思表示を受けた後に、詰まっていたトイレを修理し、その修理代金30万円と敷金30万円の合計60万円が返還されるまでは甲を明け渡さない、と主張した。
- 2 Aは、Bを相手にしたくなかったので、甲の使用を望んでいたCに、月額12万円、敷金36万円で賃貸した。
- 3 その1か月後、BとCは和解して、CはBから甲の明渡しを受けた。
- 4 さらにその半年後、Aは甲をDに売却し、Aから、「甲の所有者がDに変わったので、来月分から賃料はDに支払って欲しい」旨をCに文書で連絡した。
- 5 その後、Aは甲について所有権保存登記をし、Dに甲の所有権の移転登記を行った。
- 6 Cが賃料を支払わないので、Dは賃貸借契約の解除を主張した。

(問1)

1において、Bの主張は認められるか。(30点)

(問2)

2の時点において、CはBに対して甲の明渡しを求めることができるか(後の3の和解は考慮しないものとする)。(30点)

(問3)

4の時点において、CはDからの賃料の支払請求を拒むことができるか(5以下の事実は考慮しないものとする)。(20点)

(問4)

6の場合において、Cが解除を争わずに甲から退去したとき、CはDに敷金の返還を請求することができるか。(20点)